

備前大島の地理學的考察Ⅱ

— その變遷と地理的條件 —

星 野 輝 男

序

備前大島の著しい變遷過程を考察するに當つて、まずこの地が島嶼であり本州西端中國地方の本土から隔つた瀬戸内海上にあるということ⁽¹⁾、さらにこの島嶼が特有な地理的諸條件を有していることを前提として考えねばなるまい。

一般的に連續した土地における一地方の變遷過程を考える場合には、たとえ相當の隔絶性を有していても、それは海上の島嶼の場合とは自からその容態を異にするものである。〃離れ小島のような〃という比喻はいまこでそのまゝ現實の條件として働いていることを忘れてはなるまい。

また既に述べたところであるが、全島花崗岩の五つの島々よりなり、二つの瀬戸を有して、山嶮しく海に迫り、相當の海深を有し、舟の發着に便である點⁽⁵⁾、曾て樹木に蔽われ、本島には飲料水も存在し⁽⁷⁾、さらに潮流の關係より避難逃避に好適地であつた⁽⁸⁾、という幾多の地理的諸條件も、この島の歴史的展開に際して大きな要因として働いたことは見逃し得ない事實であらう。

扱、まず地名の由来よりみるに

「犬島の絶頂に犬の形したる巨岩あり、島民之を犬石明神と號す」(金比羅參詣名所圖會)

「此島の内、つつみの瀬といたの岩穴白石杯云所あり。山頂に犬岩とて大なる石あり、遠く望み見れば犬がうつくまりたるに似たり、是に依て名を得しにや」(備陽國誌)

「犬を此島に流す事今にあり、古よりの事と見へて、枕草紙に翁丸といふ犬、夫婦のおもとといふ猫を追ければ、犬島へ流しやらんといふ事見ゆ、古き島の名なりけり」(吉備溫故)

「島中に其形犬に似たるの巨岩あり、島名ここに基く」(邑久郡誌)

「ここに犬に似たる巨巖あり、島名これに基く」(邑久郡誌)

などある處より、犬島の象徴ともいえる犬石より名付けられた犬島をもととして、これよりこの島嶼を犬島と呼ばれたものと考えてるのが一應至當の様である。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

次に、この犬石にまつわる傳説として

「犬石は山上にあり、高さ二間、回り四間計り、形犬に彷彿たると其頭乾方に向うこと又奇也。世に云う此石の末を採つて帶れば獺犬に噛るゝ事無し。或は獺犬を此島に放ちやれば癒えて元の如くなると云う」(東備郡村誌)

「大神と云ふもの西國にあり、藝防の間最も多く付て人を悩ます。惡寒發熱瘧の如し、此病備前より以東に無し、病める人も犬島より東に至れば立ちどころに癒ゆと云へり、尤も奇なり、是風土の然らしむるところにや、未だ其理を知らず」(東備郡村誌)

また、大島の古い村社である天満宮に關するものとして

朝日村大字大嶋字六郎島鎮座、祭神菅原神、相殿應神天皇、住吉大神、手力男命、「七社御由來記」には「大嶋天神大嶋之脇大松之本豊嶋石之御社に御鎮座年數不知」とあれば往古は石の御社なりしを文明元年丑九月木の御社に改築・正徳元年辛卯九月大嶋奉行河瀬源兵衛師美、相殿の三神を勸請し、元文三年戊午年九月再建立、明和四年拜殿建立用材はすべて大嶋御林のもの也。明治三十二年大阪築港のため本社敷地の巖石を採掘せしかば同年十月二十二日現社地へ遷宮。社記録に菅公筑紫へ左遷の途本嶋に着船犬と釜とを愛でられ千疊岩に上り小松を根曳き移植されしが、數百年を経たる明治年中枯れ朽ちたりといふ。

本社由緒資料に「大島由來記」及び「神話犬の島」があり、菅丞相西下の折の傳説を傳えている。

「大島由來記」には

天満宮昔時菅丞相と申奉りし時、時平の大臣の讒奏により筑紫へ左遷せられ給ひし時、當嶋の沖を過給へば遽に空臺海上荒難風雨稠して逆浪に御座船危うく漸々當島に御船を着給ひ暫時御安座在す。此時小舟に棹し老翁現ず是を側近く召寄られ、菅丞相の宣、此島は四角四面にて瀬戸の波平にして由有島と見ゆる、此島の由縁物語せよと宣。彼老翁答へて曰抑此釜島と申すは昔何國をもなく漁父來て此島邊に年月を送侍る或夜の靈夢に、汝に妻女を授與ふると告有て夢覺めたり、是は不思議と心耳を澄す折柄面白く鼓の音聞ゆ、立出見れば瀬戸の波の音誠に波の鼓寥々と打につれ龍女磯に顯れ出給ふ、其の粧珠の簪、鬢の黛月も照添ふ花の姿なり、則ち房へ誘ひ歸り偕老同穴の契り不淺、世を賑はしく經つとかや。是より此瀬戸を鼓の瀬戸と號け沖の島を沖鼓、地の島を地の鼓と此時より言傳ふ。去程に妻女機上して三載の間小絹を織、機殿を爰に賜ふや彼處に賜ふやと言所を阿古屋と號。機殿を作る所を機軒と號、一機の絹調濟の日□人機殿へ來り彼絹を懇望す、此絹に世の寶を

替傳んと言て駒犬に釜を添、引替絹を取瀬戸の波間に入水せり此所を寶傳の磯と號。漁夫絹を取返さんと犬釜を投捨て恕を成す時に犬釜共に鳴渡り虚空へ上らんとして釜は波間に靜り釜石と成り、犬は島の嶺に居りて犬石と成。妻女は瀬戸の波間に逃入石と成、漁父も女の後を慕ひ瀬戸に入石と成、今の祖父石、祖母石是なり。島の岩根より龍宮城への通ひ路岩石の峽に穴道有此時穴中途より塞り龍城への往還中絶せり、右等の石悉く龍宮城よりよらせ給ふ靈石なり、一機の絹は龍宮城に納るとかや、此翁暇申とて行衛不知搔消如く見えたりき、是住吉の御神なり。菅丞相御感不淺則釜は瀬戸に靜り給ふまゝ釜の瀬戸と號け犬の島に居らせ給ふにより犬島と稱へ、繁榮の島と宣ふ。菅公靈石敬拜御祈誓有れば忽に犬石、釜石鳴動すること夥し。鳴止否や海上長閑に難風順風と成御悅喜限なし、此靈石に祈りなば風雨の難を遁旱乞雨乞亦は夫婦男女のかたらひ其の外海上の難を免る、其の證忽然たり此犬石の座石十八間に二十五間有此石上に御座したまひ四方を眺望し給ふに、東は播磨灘浮ぶ繪島の數々も名殘ぞ惜しき後の白波、南には西國の山もほの々と漕行く船は畫の如し、西は吉備子島、島を近く見渡せば北に高山峰を並て西國往還の海道を遮り、菅丞相御感に堪不賜小松を根にして犬石の前に植玉伊、干時誓て曰吾一度譏者の實否を糺し歸路の望を達しなば石上たりといへども此松幾程なく成長せよと宣。菅丞相の陰德は月日いやまし譏者の讒想は月日に露顯して終に正一位天滿大自在天神と成せ給ふ。荒人神の御感心の靈石を信心奉る輩加護の證考舉るに不遑、則天滿天神犬島地主氏御神相殿に安鎮座す、住吉大明神・八幡宮・春日大明神は菅丞相漂船の時白石島に住吉大明神白髮の老翁と顯し守護し給ふ。鳩島に春日大明神左男鹿に駕し鹿の耳箒の如振立御出願擁護し給ふにより、菅丞相喜感し其の島々の名白石島・鳩島・箒島と宣命し。是犬島の鎮主大御神と尊敬禮拜し給ふ故御同殿に安鎮尊敬奉利幾。

「神話犬の島」は

「往昔紀州日野川の渡守が犬をつれた浪人より一夜の宿の禮として愛犬を譲られたが、その犬の頸輪の中の厚紙より、日毎砂一合を與えば一兩小判二枚を生むとあり、言の如くして一日二兩ずつさすかつた。併し或日慾を出し二倍を得んとして孫と犬を死なせ慨嘆することとなつた。菰に包まれ川に投げられた犬が内海に流れ、犬島となつたのである。なお菅公西下の折、夜犬の啼聲に導かれて犬島に上陸され歌と松を残された。」
という趣旨の物語を傳えている。

しかし乍ら、これらの信憑性については謂うまでもなく疑問あり、犬島の地名があつた處に後世假託がなされ、資料の添加が行われたものと思われる。⁽¹²⁾

しかしそれにも拘らず、文獻上にみえる定着民をみた元祿時代より遙か以前に島名が存在していたことと、人間接觸があつたことは、前述の犬島の地理的位置、條件より十分推察しうるところである。

これらの條件により犬島の歴史を考える場合、元祿以前において、石（石材採取）との關係、及び海賊との關連について検討する必要があると思われるのである。

犬島の石⁽¹³⁾については

「大石奇石も亦多し。松竹石、陰石、釜石、犬石等共に本島の西犬島にあり。陰石は女陰、松竹石は陽に能く似たり。釜石は本島と犬島との間なる磯にあり、釜を伏せたる形の如し。此石毒あり、禽虫此石に觸るれば立ちどころに死す砒石の類なるべし」⁽¹⁴⁾（東備郡村誌）

「全島悉く花崗岩を以て滿され、名たたるものに千疊岩、釜岩、松茸岩、烏帽子岩、祖父岩、祖母岩の諸名あり」

（邑久郡誌）（邑久郡史）

などある如く、曾ては形によつて名付けられた奇巖奇石の類が多く、名勝をなしていたものと傳えられているが、

大阪築港のための採石により大石を除いて消失してしまつたのである。また採石された石の利用については、

「古史に所謂堅強美白なる眞石多き大島は、古來採石の音を絶たず。或は相州鎌倉八幡宮の鳥居は此島の石にて作りしと」(東備郡村誌)

「大島の眞石は古來名高く、鎌倉八幡宮の鳥居、大阪城の石垣、大阪築港並に旅順港閉塞には、この石材を用う」(邑久郡史)

とあり、古くは鎌倉八幡宮、大阪城築城、上道新田、岡山後樂園に用いられたと伝えられ、また近くは、皇居造營、旅順港閉塞に、そして大阪築港には全く大島の石を以て設營がなされたのである。⁽¹⁶⁾

數多くない島内の地名も、岩や石に關係あると伝えられるものが多い。たとえば、八軒は八間の長さの石が切り出された處より、釜の口は釜石の近くにある處より、沖鼓は島に岩穴あり鼓の如き音する處より、六郎島はロクロを据えたという處より地名となつたと伝えられている。

次に瀬戸内海海賊と大島との關連について眺めてみると、國史上の内海海賊第一期⁽⁷⁾の時代たる奈良朝以前の時期のことは資料より明らかにし得ない故、大島との關連は求むべくもないが、しかし恐らくこの時代には關係を全く有しなかつたものと考えられる。第二期⁽¹⁶⁾たる奈良朝に兆し、平安、源平の時代⁽¹⁹⁾においては内海⁽²⁰⁾の海賊の活躍極めて激しく、遣唐使止みて後平安以後、源平に利用せられ、元寇撃退に効奏し、宋、元、明と交通を保つた當時、大島は海賊の集合地、寄港地としての關連のあつたことを物語つてゐる。この時期には内海⁽²¹⁾の海賊に關してその他多くの記録が見られるが、その中に大島に關するものも見られる。

「天文の頃、兒島群は四國の細川家に屬し、上道郡は松田に従ひて是等より乙子の邊に人數を出し、又大島邊の海賊までも陸に上りて民家を亂妨しなやます故……(備前軍記)」

「……純素、汐通に在て聞え、兵船三十餘にて漕出し、大島の瀬戸を差塞ぎ洩さじとこそ擱へたり……」(東備郡村誌)

「去程に純友が討手とて山陽道に向われし、左衛門佐藤原倫實は六千餘騎を引率し、天慶三年二月十三日都を立て、二百餘艘の兵船を汰へ、同十九日辰の尅に備前國釜島に推寄せ……大島の瀬戸を差塞で、鯨波を作り懸洩さじとこそ攻めたりけれ。純友が勢、力を得色を直して戦ひける。官軍前後に敵を受け進退自由ならざりければ、終に戦負て藤戸の渡りを回よつて讃岐路へと引たりける。」(前太平記⁽²⁾)

「兒島の南の海上には、島々多く物蔭あれば、住吉より海賊をなすに便りよくして、往還の船、世々其難に逢う者多し。今亂世に乗じて、彌々海賊横行する事隙なし。其の海賊の集りけるところ、兒島郡日比と、邑久郡大島となり。故に其頃、日比の關、大島の關と唱へて、海路通行の難儀の所とせしが、大船に大黒丸と夷丸といふ船ありて、是にて渡海すれば、海賊の妨ぐる事なし。其外も此船に屬せし由をいひて、金銀米錢を出して通行せしと云ふ。」(備前軍記)

「鼓島(大島より一町餘東)に戸板の穴とて深き洞穴あり深さ十三間あり、何れの頃にや戸板某と云周防の國司なりし人、此大島に舟繫りせしを、海賊これを殺して財寶を奪取ければ、戸板の子兵船を催し大島に押よせ海賊のかくれ住ける洞穴の口に薪をつみ悉く燒き殺しけるとなり。其外此島に海賊の住しこと多し、渡來の舟を惱せしこと多し、備中の穗田備中守難風にあひ、此島に舟繫りせしに海賊の爲に殺されしと云。又永正の頃藝州の武田判官元信の家臣溫科左衛門家親と云もの上落して歸りに、此大島の海上を通りけるに、海賊、舟を乘來り財器を奪んとせしに、此左衛門怪力にて帆桁を取て、賊船二艘をつき沈めければ、殘船皆其勢に恐怖して引退きけるとなり。」(吉備溫故)

斯くの如く、犬島は瀬戸内の海賊の一據點であり、藤原純友の徒がこれに據つたのをはじめ幾多の海賊の巢窟であつたことを窺いうる。その中で著名なものは日本佐奈介である。⁽²⁴⁾この様な海賊活躍の舞臺となつたのは、内海の潮汐分界線、會合線にある内海交通上の要地を占めた位置と、⁽²⁵⁾平地に乏しい鬱蒼たる高峻な地形と、繋船に便な海岸をもち、洞穴や瀬戸もあり、恰好の條件を備えていたからである。

しかし、土地の生産性をもたず、一舉に多人數を維持し得ない地理的條件は、他の内海の海賊據點の如く終止後もその子孫が住みつくには至らず、一旦無人の島となり、改めて入居が行われたのである。

二

備前犬島の本格的な歴史は、既述の如く元祿以後に始まるが、これは大きく明治中期までと、明治中期以後とに分して考えることが妥當である。そしてこの二つに大別したものを更に歴史的な時代と照應させて幾つかの段階に區切つて考察するのが便であらう。

國內の太平とともに海賊の活躍も收つた平穩な瀬戸内海にあつて、犬島も他の島々と同じく半農半漁の平凡な島の生活が展開され、明治中期まで大した波瀾もなく續いたのである。しかしこの時期を一つにまとめて扱うことは不便であるから、明治初年までとそれ以降中期までとに便宜上區分する。また明治中期以後大阪築港に關係した隆盛期に入り、日本の社會情勢の變遷と相俟つて大きな變化が起り、犬島も安穩な島嶼生活から揺り動かされて、特異な變轉を展開するわけであるが、これを昭和初年までにて一應區切る。この内に精鍊所時代及びそれ以後の空白衰微期が含まれる。

昭和十年以降は日本硫黃株式會社が設立され現狀に接續する故、現代として考える。

元祿初年に定住民を迎えるまでに、先ず犬島には番所が設けられ、キリシタン探索及び遠船見張が行われ、その秀れた位置と地理的條件が國內治安確立して後も先ず利用されることから近世以降の展開が始まつた。

寛永五年に池田藩にて切支丹穿鑿のための在番所を牛窓に設け、その在番構所の中に犬島の地名がみえている。⁽²⁶⁾
(寛永十七年、十九年にも異國船遠見番所置所についてのことあり。)

また萬治二年耶蘇禁令が頒布されて萬治三年犬島にも番所が設けられた。⁽²⁷⁾以後享保、元文と在番所が置かれていたことが記録より知られる。⁽²⁸⁾

在 番 所

牛窓在番、寛永十九年ノ向井十藏

屋敷畑一畝三步、一石六斗代、高一斗七升六合、物成八升一合、免四ツ六歩、牛窓付

右之通牛窓下濃七介様屋敷へ、寶永五年ニ加里渡り物成引ニ相成居申候、但本屋敷は自先年高引ニ成居申候

享保元申九月廿六日 大莊屋尻海村平兵衛

元文二年己九月牛窓在番屋敷唯今迄代り目ニハ籍被仰付候所、左候而ハ殊之外及大破候付、向後八年振

には御籍可被仰付旨御年寄中御聞届

牛窓在番所定規

一、在番構所如左

正儀 久々井 犬島 東片岡 鹿忍 法傳 小父雁 牛窓……

在 番 所

犬島見廻リ之儀者不及申、牛窓之前島、黒島へも間々見廻り諸締り心を付可申候、此賃米は七合五勺宛、一

年切に可立遣候、以上

享保二酉年十一月十四日

八木 惣兵衛

小堀彦左衛門

犬島奉行中

右書は在番安東松右衛門へ於御郡會頭相渡

享保十二未六月犬島在番人代米相止米六俵宛被下

享保十五戌八月犬島在番人代米如前々一人宛被下

此島に定着の住民が入居するに至つたのは元祿初年以降のこととて、この後半農半漁の生活を展開していつたものであるが、之を記録に徴すれば次の如くである。

「元祿の初年佐藤、井上の二人住す、其三年犬島檢地の令あり、同時に釜島郡犬島と命令され、同七年池田候より認地御下附と共に久々井村の内犬島と改名さる。當時の檢地帳に山野共五十町、田地宅地十四町五反、人口三十、同年御在番所を設けらる。」(犬島小誌)

「往古は大島に人家無之、元祿年中兒島郡番村より今紋太郎家一軒、邑久郡東片岡村より今善太郎家一軒出百姓被仰付、田畑開立耕作致居申處追々人家相増、今文政の頃に至ては家數門別共十八軒人數八十餘人皆耕作に漁業を兼て世を營む」(池田家記録賃銀留)

開田上納米(文政五年大庄屋上阿知武右衛門書付)

田畑畝數四町三反九畝拾三步、高八石四斗壹升五合、物成貳石貳斗九合
文政五年六月六日

犬島の儀家數人數追々相増難有住居仕居申候間、爲冥加此度御物成之外壹石三斗六升六合、當島が毎年拂上度段島人共が申出候

右承届

同年十二月廿五日左之通 邑久郡犬島惣百姓

右島元來元祿年中之頃に漸家數二軒有之候處、追年開方出來家數人數も相増、益土地繁榮致し御國恩難有旨を以、先達而願出爲冥加今年より以後年々上ケ米いたし、惣而島中情合宜實意之趣相聞之候、仍之譽遣候

名主五人組頭給

文政五年五月二日

一、米九斗六升

邑久郡犬島邑主給

一、同四斗

五人與頭給

右之通向後立來米が毎歲被下候

從前々久々井村役人犬島を兼帶致候處、無給故此度始テ右之通被下

見るべき記録としては以上右に擧げたのみにて、他には

林 守

明治五年八月廿七日 犬島久右衛門

犬島御林守申付候、立來米より毎年六斗づつ被下候

とあり、また「備陽記」(享保六辛丑歲編)に家數二、人口一三の記録がみられるのみである。此等より考えるに、元祿初年に二軒の百姓が兒島郡と邑久郡の地方より出百姓として來り住み、當初は二軒にて十人餘りの人口であつた

ものが、文政年間に十八軒八十餘人と發展し、小村の形態を成すに至つたものと想像せられる。この間在番所も設けられ、林守も置かれ、また人口増加に基いての土地開墾の業も行われたことが知られる。他に記録を見出し得ず、また現在島に舊家は殘存せず、遺跡なども無いので右の状況を確認し得ないが、本島の中央丘陵地にある昔からの墓地について墓石の年代を調べた處、古いもので破損崩壞などにより年代確認不能の墓石三基のほか、文化、文政年代のもの三基あり、それ以上古いものは見當らず、あとは幕末頃のものとなつてゐることより、この元祿以後の時代の犬島の繁榮した一應の頂點が文化文政の頃であり、大體右の經緯を裏付けるものと思われる。

その後も、人口増加の趨勢は續き、土地開墾に銳意努力が拂われたが、限られた土地に地形的條件もあつて、採石の進行とともに僅かの成果しか擧げ得なかつた。

「安政四年巳四月犬島新開畑檢地帳」によれば

畝數合五反壹畝壹歩 高壹石五斗三升壹合物成三斗六合

の畑が開かれ、また「文久二年邑久郡大手鑑」によれば犬島の開田畑は

畝數一反九歩 高三斗一升六合 物成九升五合

となつてゐる。

かくの如く、瀬戸内海の小島嶼であり、水はあるが急峻な地形で、全島花崗岩よりなる土質の中に、僅かに開發された農地をもつ、半農半漁の比較的長い平凡な歴史が続いたが、犬島の生活は幕末明治初年を頂點として飽和點を越えた戸數人口の壓力より半農半漁の經濟維持が困難となり何らかの打解を必要とする情勢となつた。幕末明治初年より明治中期までの時期は表面的にはなお前述の時代の繼續ではあるが他面明治中期以後の新しい展開に向うべき機運の醸成された胎動期でもあると考えられる。

さて、幕末明治初年の大島の状況をみると

明治四年辛未十一月の「邑久郡大島取箇狀之事」によれば

一高 拾五石壹斗九升六合

内

田高 三石壹斗四升七合 物成 六斗貳升九合

畑高 拾貳石四升九合 物成 三石六斗六升壹合

物成合 四石貳斗九升

となつてゐる。

また明治五年壬申正月の「壬申戸籍簿」によれば戸數は二七戸、人口數は一四九人となつてゐる。なおこれが生年をみると、嘉永、安政、天保年間の出生が著しく多く、また文化文政年間の出生もかなり多く、前段に述べた人口増加や開墾の狀勢を裏書きしている。また文化文政年間の出生もかなり多く、前段に述べた人口増加や開墾の狀勢を裏書きしている。また配偶縁組についてみると、矢張り島内が多く、ついで兒島郡番田村が多く、他は殆んど地方各地に一樣に分布してゐる。⁽²⁰⁾

土地狀況については、明治七年二月「檢地野帳」⁽²¹⁾、明治八年十二月「地價取調帳」⁽²²⁾、明治九年三月「山林原野調査野帳」⁽²³⁾によれば

土地 田六畝二八歩 畑一四町四反一畝四歩

屋敷 八反八畝一三歩 山林原野その他二九町九反一畝八歩

收穫 麥七五石七斗七升 米三斗四升

となつており、明治初年當時の犬島の状態を知ることが出来る。

次に明治二十年頃のものを眺めて、その比較をしてみれば、明治二十年十月の「戸籍簿」によれば戸數二十八戸、人口數一二二人となつており、戸數は一戸増したが人口數は可成り減少しており島外に流出していることが判り、島の經濟狀況が飽和に達して何らかの打開を必要としてゐることに、本籍外人口の流入狀況を物語つてゐる。これをよく示すのは明治二十八年二月の「種痘名簿」であり、戸數は二十九戸であるが世帯數は四一世帯、人口數一八五人となつてゐる。

土地狀況については、明治二〇年一月「地押取調表」、明治二〇年九月「丈量帳」、明治二〇年十二月「土地臺帳下造」、明治二〇年十二月「土地臺帳附屬地籍總計」、明治二四年十二月「地籍總計」、明治二一年一月「地租臺帳」などよりみると

田 六畝拾五歩 畑 一七町三反六歩 宅地 一町一反一畝十六歩 山林原野その他 二六町三反八畝一〇歩となつており、土地の開拓は聊か進んだものの、人口支持力の限界點に到達していることが利る。

住居の狀況については、明治十七年十二月の「建家坪數調給圖」により集計した結果をみると、舊來の家屋二十五戸の中、最大のものは建坪二十一坪附屬建物七のもので、ついで十九坪のものほかは十五坪代が五で、十坪以下の建坪のもの十あり、最も貧弱なものは二坪というものすらある狀況である。明治初年以後新築と思われるもの十二戸あるが、三十一坪餘の長屋建を除けば略同様な規模で、犬島の經濟・社會の程度状態をよく察することが出来る。人口飽和と經濟的苦惱に喘いだ様子は、この時代の公證帳簿³⁴の内容からも窺われ、島外よりの借入件數極めて多く、耕地山林を抵當に單獨或は公同で負債をしている。この情勢を一段と押し進めたのは災害の少い犬島にとつて全く空前絶後の明治十七年の暴風雨激浪の襲來であつた。これによりさらでに少い耕地が荒廢して甚大な被害を蒙つた。明

治十七年九月「荒地一筆限取調帖」同上の「繪圖」、明治十九年一月の「荒地起返丈量繪圖」⁽³⁶⁾などの資料よりこの間の消息を知ることが出来る。

災害の復興は明治二十年頃までには片付き、また土地生産物を補う海産物もかなりあつたと思われるが、一方では昔から名のある石材採取がある程度の比重を占めて登場して來たものと考へられる。前述の島外よりの流入人口の主體は石工であつたのではないかと想像される。この結果として二十七・八年戦役の旅順港閉塞に犬島の石が用いられたのであろう。かくして日本國內の近代國家的發展に伴う環境條件と犬島自體の半農半漁經濟の行き詰りから、ここに日清戦以後の新しい展開、すなわち採石業を中心的な生産業とした發展が大阪築港の採石場となつたことより顯著にみられることとなつたのである。犬島の地理的諸條件は好むと好まざるとに拘らず、こゝに非常に大きな變轉期を迎えて、明治中期以後近代資本との接觸より急激な變貌の浪に洗われ、全島の景觀の變貌とともにその經濟社會構造も一變するに至るのである。

註

— 未完 —

(8-4321)

拙稿「備前大島の地理學的考察(Ⅰ)——現況と地域性について——」人文論究四ノ三
クク「島嶼近代化の事例——瀬戸内海大島の場合——」一般教育諸學研究論叢第一號

(9) 枕草子第七段中に「この翁丸うちてうじて大島につかわせ……」とある。

(10) 枕草子の金子元臣釋に「類聚國史に平城帝の大同年中に、大を惠ませ給ひて、備前の離れ島に流しやりける事見えたれど、ここはその島をさしていへるにあらず」とあり、犬島は大を流す所という程の意なりと。

(11) 犬石は山頂にあり、場所より考えて自然の産の公算大と思われる。

(12) 犬石についても絶對的な證據はない。

(13) 平凡社百科辭典に「犬島御影」黒雲母花崗岩。岡山縣邑久郡朝日村字犬島に産し、青色と肉紅色との二種の長石、白色の石英、黒色の雲母、黄鐵礦を含む。組織は中粒で長石の大きいさは不揃である。堅牢でよく風化に堪えるので大阪地方に需要せられ、家屋用材、門柱、欄干、捨石、敷石等に用いられる。

(14) 今は存在しない。大阪築港採石の際無くなつた。

(15) 採石關係者、及び古老の言による。資料發見できず。

(16) 「大阪築港誌」

(17) 大正二年八月刊「備前六郡教育會」冊子 永山卯三郎

(18) 同右

(19) 「續日本紀」聖武天皇天平二年九月條下。「續日本後紀」仁明天皇承和五年二月條。「三代實錄」清和天皇貞觀四、八、九年條。陽成天皇元慶五年五月條。

(22) 「今昔物語」「前太平記」「今鏡」「體源抄」などに見らる。

(23) 備前國釜島は兒島郡所屬といえど、平賀元義は「兒島下津井前の釜島といふは誤なり、前太平記に犬島の瀬戸より、ときを作り釜島を攻むとあり、今久々井村の内犬島より島の内に釜の蓋、釜の内といふ處あり」と説く。

(24) 「南海治亂記」、前掲「備前六郡教育會」冊子

(25) 備中小田郡の海上、神島、白石島より讃岐國、箱崎粟島に至るの間の一線は瀬戸内海に於ける東西兩潮の分界線にして又其會合線なり。

(26) 「池田藩履歷略記」

(27) 犬島番「萬治三年十一月廿六日、日録」に犬島番人ニ吳服藏手代山田藤兵衛被命

(28) 「池田家文書」

(29) 各地とは、西片岡、神崎、久々井、鹿忍、下河田、上道郡、南幸田、四國地方である。

(30) 明治七年二月「檢地野帳」邑久郡大島三冊

(31) 明治八年十二月「地價取調帳」岡山縣下東第拾四區備前國邑久郡大島一冊

(32) 明治九年三月「山林原野調査野帳」大島二冊

(33) その他二十三年の「地租臺帳」などあるが、これらは一連の資料で大差はない。

(34) 明治十五年、十九年の公證帳簿あり、他に斷片的な記録がある。

(35) その地誓約書など斷片的な記録がある。

(36) 漁業關係の資料は全く缺いている。古老の話による。

(37) 明治二十二年、三十二年までの「人口異動目錄」や前掲「建家坪數」の内容より推察。